

IV-44 成熟型社会の都市デザインについて

岩手大学大学院 学生員 ○水出 佳奈
岩手大学 正 員 安藤 昭

1. はじめに

機能主義的な成長型社会から持続可能な成熟型社会への歴史的転換期である今、地球環境保全、機能性、文化性、美しさなど、あらゆる視点を統合した都市デザインが望まれている。筆者らは、「都市景観の構成」¹⁾を基に『解釈モデル』（図-1）を創作し、これを用いて「都市デザイン体系」²⁾を構築した。

本研究は、この都市デザイン体系の前半部分である都市の実体と課題の分析から都市デザインの課題と理念を確立するところまでの、ケーススタディを行うことを目的としている。対象都市は、日本の都市の特徴が顕著に表れている近世城下町起源の盛岡市とした。

研究の流れを図-1に示す。まず、日本の都市の実体や課題を明らかにするために、解釈モデルの4つの視角について、東北地方と気候風土が似ており福祉や環境分野で先進的存在といわれているドイツとの比較分析を行う。次に、盛岡市を対象に解釈モデルの4つの視角から分析を行い、盛岡市の実体と課題を明らかにする。最後に、この2つの結果から盛岡市の都市デザインが実現すべき課題と都市デザインが目指す理念を明らかにする。

2. 日独比較による4つの視角における分析結果

解釈モデルの4つの視角について日独比較分析をし

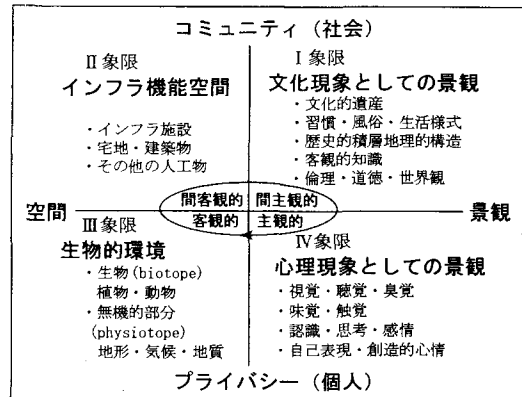


図-1 解釈モデル（分析の4つの視角）

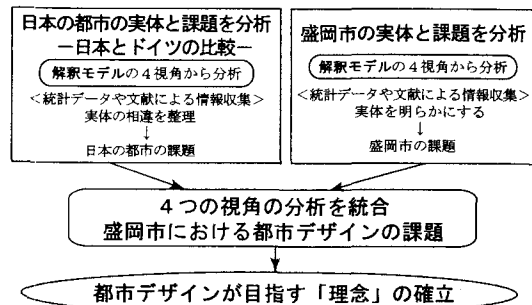


図-2 研究の流れ

表-1 日独比較による日本の都市の実体と課題の分析

視角	分析項目	日独比較による日本の都市の実体	日本の都市の課題
生物的環境	1 植生	南国とも広葉・混交樹林で褐色森林土。日本の方が全般的に豊かである。	豊かな植生の保全
	2 動物	南国とも狩猟や工業化で野生動物が減少。日本の方が豊かであるが絶滅種・危機種ともに多い。	多様な動物の保全
	3 地形構造	面積はほぼ同じだが、ドイツは平地が広いのに対し、日本は山岳地帯が広く高低差があり変化に富む。	
	4 河川	ドイツには河川長・流域面積の大きい国際河川が流れる。日本の河川は短く、流れは変化に富む。	自然のままの河川を保全する
	5 気象	南国とも温帯性気候で四季があるが、日本の方が降水量が多い。	
インフラ機能空間	1 国土利用	ドイツは国土の7割以上が社会的に活用可能な土地であるが、日本は3割程度である。	限られた土地でメタハリの国土利用
	2 都市構造	ドイツは教会や広場を中心にコンパクトで高密度な中心部が広がり、市街地を囲む交通網を徐々に宅地が埋める。日本の旧市街地の中心は城址公園で駅の周辺が新市街地となり、郊外にスプロール状に宅地が広がっている。	スプロール化の抑制、市街地のコンパクト化
	3 交通	両国とも自動車保有台数が増加しているが、ドイツは路面電車の復活やトランジットモールの導入に積極的である。日本では公共交通の整備が遅れている。	マイカー使用の抑制、公共交通の整備
	4 道路	ドイツの道路には歩道や自転車道が整備されており、広場が多い。日本では幅員が狭くなるほど歩道がなく、自転車道も少ない。日本では道路がドイツの広場の機能を担う。	歩道・自転車道の整備
	5 バリアフリー	ドイツではハード・ソフト両面の整備が進んでいるが、日本ではハード面の整備に取り組み始めたところである。	ハード・ソフト両面のバリアフリーの推進
	6 工作物	ドイツでは看板等が街並みに調和し電柱・電線は地中化している。日本では看板等が氾濫し電柱・電線は多くは地中化していない。	看板等の規制、電柱・電線の地中化
文化現象としての	1 都市の個性	ドイツの都市の起源はそれぞれで、戦争や火災で街並みが破壊されても復元しているので個性豊かな町並みである。日本の都市の多くは近世起源で、城下町建設で町割りや山当てがなされた。その後戦争や火災で街並みが破壊されてしまっている。現在は個性の少ない街並みとなっている。	都市の個性の創出
	2 まちづくりの法律	ドイツは都市全域を対象とする土地利用計画のFプランと地区を対象とする拘束力の強いBプランによるまちづくりである。日本は都市計画法と建築基準法により土地と建築物を別々に規制するまちづくりである。	
	3 家族形態	両国とも少子高齢化、核家族化、世帯あたりの人員減少が進んでいる。	少子高齢化の対策
	4 住環境	ドイツには住環境の美観を維持する決まりや習慣があり共通認識が徹底している。日本では住環境の美観を維持する決まりがなく、その共通認識もあてはまらない。	住環境の美観維持の取り組み
	5 環境教育	ドイツでは学校と家庭での環境教育が徹底している。日本では環境教育の位置付けが明確でなく徹底していない。	学校及び家庭での環境教育
心理的現象としての	6 博物館	ドイツには学校と家庭での環境教育が徹底している。日本では環境教育の位置付けが明確でなく徹底していない。	更なる充実
	1 美の尺度	ドイツには、美の源流はイタリアとギリシャであるという美の共通尺度があるが、日本の美の捉え方は多様である。	美的感覚を養う環境づくり
	2 音楽観	日本では商店街の音楽や宣伝のアナウンス、交通案内で音が溢れている。ドイツにおいてはこれらは必要最低限である。	賑わいの中にも静かな空間
	3 原風景	ドイツの風景は保全されやすく日本の風景は変化しやすいことから、日本においては、個人の美意識や価値観に大きく関わる原風景（幼少期や青春期の生活環境や風景）は保全されにくい傾向があるといえる。	原風景の保全と創造
	4 都市生活のゆとり	ドイツでは学生も労働者も日本より余暇があり、散歩する人も多く街の風景もゆったりしている。日本では余暇が少なかつた街の雰囲気も感じない。	孤独になれる空間・落ち着きのある空間
	5 自然観	一般に、ヨーロッパでは自然に対し能動的であり、日本人は受動的であると言われる。	積極的に自然を保全していく意識の促進

表－2 盛岡市の実体と課題の分析

視角	分析項目	盛岡市の分析による盛岡市の実体	盛岡市の課題
環境的・生物学的	1 植生	市域に1,144種の植物が生息しているが、危急種もある。	生育場所の確保
	2 動物	市域に4,140種の動物が生息しているが、絶滅危惧種や天然記念物も含まれる。生育域が変化している。	生息場所の確保
	3 地形	市域全体の79.4%が傾斜8度以上で、50%以上が起伏量400～600mの中起伏地である。	斜面の切り崩しの抑制
	4 河川	15の一級河川と18の準用河川が流れており、市街地中心部に3つの河川が合流している。動植物の生育域となっている。	自然度の高い河川の保全
	5 気象	寒暖差の大きい典型的な内陸性の気候特性である。梅雨の影響は弱く比較的降水量は少ない。	
機能空間	1 市街地の発展	河川周辺の平坦な土地を中心に、河川や主要道路沿いに市街地が発展してきた。現在は駅西口地区と盛南地区で開発事業が進行中である。	スプロール化を抑制・計画的な市街地形成
	2 土地利用	田畑と山林の割合がわずかに減少し、宅地の割合が増加している。	計画的な土地利用
	3 都市計画	都市計画区域及び市街化区域の面積は増加傾向である。商業系の用途地域面積が増加している。	計画的な市街化区域・用途地域
	4 交通	2環6放射の道路網パターンとなっている。自動車保有台数が大きく増加し、バス利用者が減少している。	渋滞を軽減させる道路網の整備、バス利用の促進、自動車使用の抑制
	5 道路	国道・県道の整備が進んでいるのに比較すると、市道の整備(特に改良)が遅れている。	市道の質を向上させる整備の促進
	6 建築物	建築確認申請件数が減少している。マンション件数が年々増加している。	建設可能地域・意匠形態・高さ等の規制の検討
	7 公園	全体的に公園数・面積は増加しているが、市街地の人口や面積に対し近隣公園・地区公園が少ない。	近隣公園・地区公園の増設
文化現象と景観	1 まちづくりの変遷	城下町の建設では軍事・商業・交通に適した五の字の町割りなされた。その後交通基盤整備を中心に発展した。	城下町の歴史や街並みの保全
	2 地理的構造	北上盆地の北部に位置する岩手県の大森市所在地である。北東北の交流拠点都市となっている。	北東北の結節点である特徴を活かす
	3 人口	近年は28万人で増減は停滞している。人口集中地区は人口・面積ともに増加傾向で、全体の79.9%が人口集中地区に居住している。年少人口が減少し、老年人口が増加している。	少子高齢化の対策
	4 文化遺産	市域には、歴史的建造物・伝統行事など228件の指定文化財が存在する。	文化遺産の保全・継承・周知の取り組み
	5 社会教育施設	利用者数は全体的に減少あるいは停滞しているが、学校体育施設の利用者は増加している。	社会教育施設の運営の見直し、地域と学校の連携の強化
	6 観光	近年は日帰り客の増加傾向にあるが、全体的に観光客数は伸び悩んでいる。	観光客を増加させる取り組み
しるしの現象と心	1 市民の誇り	盛岡市民が誇りとしているもの・大切にしているものは、中津川・北上川・高松の池・岩山などの自然環境や城下町の歴史文化である。これら市民の誇りは、盛岡市への愛着を抱かせわがまち意識を高めるものでもある。	これらを活かしながら保全していくまちづくり、わがまち意識を高める取り組み
	2 感情表現	芸術的表現の場が少なく、思い出や感情を深める場が少ない。	芸術活動の場の拡大、プライベートな空間・親密な空間づくり

た結果明らかとなった日本の都市の実体と課題を、表－1に示す。

3. 4つの視角における盛岡市の分析結果

解釈モデルの4つの視角について盛岡市の分析をした結果明らかとなった盛岡市の実体と課題を、表－2に示す。

4. 課題の整理と理念の確立

4つの視角から分析を行った日本の都市の課題及び盛岡市の課題を統合的にまとめると、盛岡市の都市デザインが実現すべき課題は以下の4つとなる。

＜課題1＞ 日独比較分析よりわが国は地球環境保全の取り組みや共通意識、環境教育は遅れていることがわかった。盛岡市の豊かな自然環境と共に地球環境を保全していく施策や教育、意識の改善が必要である。

＜課題2＞ 日独比較分析から、日本の市街地はスプロール状に広がりやすい特徴があることが明らかとなった。また、盛岡市の分析から、自動車保有台数が増加を続け、バス利用が減少し、さらには少子高齢化や核家族化、単独世帯が増加していることがわかった。コンパクトな都市形態とし中心部の公共交通を発達させ、密度を高めることによって人と人とのコミュニケーションや家族・高齢者向けのサービスの充実を図る必要がある。

＜課題3＞ 日独の比較分析から、わが国は歩道や自転車道の整備、バリアフリーデザインの普及や博物館の充実が遅れていることがわかった。また、盛岡市の分析からは市道の改善や文化教育施設の見直しの必要があることがわかった。機能性や効率性だけでなく心の豊かさや充実感を生み出す、物質的・精神的に質の

高い生活環境の整備が必要である。

＜課題4＞ 盛岡市の分析から、盛岡市民は中津川や北上川、岩手公園などの自然環境や歴史文化を誇りにしていることが分かった。盛岡市の個性でもあり観光資源ともなっているこれらを都市の活力とし、また、これらに調和した美しい街並みを創造・継承していくことが望まれる。

以上4つの課題から、都市デザインの目指すべき4つの理念を確立した。

《理念1》地球環境保全の枠組みの中で人間が自然と共生し、地球環境の保全を優先する都市

《理念2》コンパクトな都市形態で交通・人・情報ネットワークの強い都市

《理念3》物質的・精神的満足度の高い生活環境の都市

《理念4》盛岡市の個性を都市の活力や誇りとし、美しい風景を創造・継承していく都市

5. 今後の都市デザインについて

今後盛岡市を対象としたケーススタディの続きとして地区デザインを行っていくが、景観法による「景観地区」を提案しその地区をデザインすることを試みる予定である。

【引用文献】

- 1) 安藤昭：都市景観の構成，土木工学ハンドブックP841，土木学会編，1989
- 2) 水出佳奈・安藤昭・南正昭・赤谷隆一：感覚統合理論による都市景観設計の体系化に関する研究（そのⅡ），第3回観光まちづくり学会研究発表会論文集，pp3-1～3-5，2004

【参考文献】

- 1) 安藤昭・五十嵐日出男・赤谷隆一・Hans-Georg RETZKO：日本の都市の個性創出のための日独地方都市の都市景観の比較研究－盛岡とダルムシュタットを対象として－，土木学会論文集，No. 431，1991
- 2) 加藤雅彦他6名，事典 現代のドイツ，大修館書店，1998 他8冊